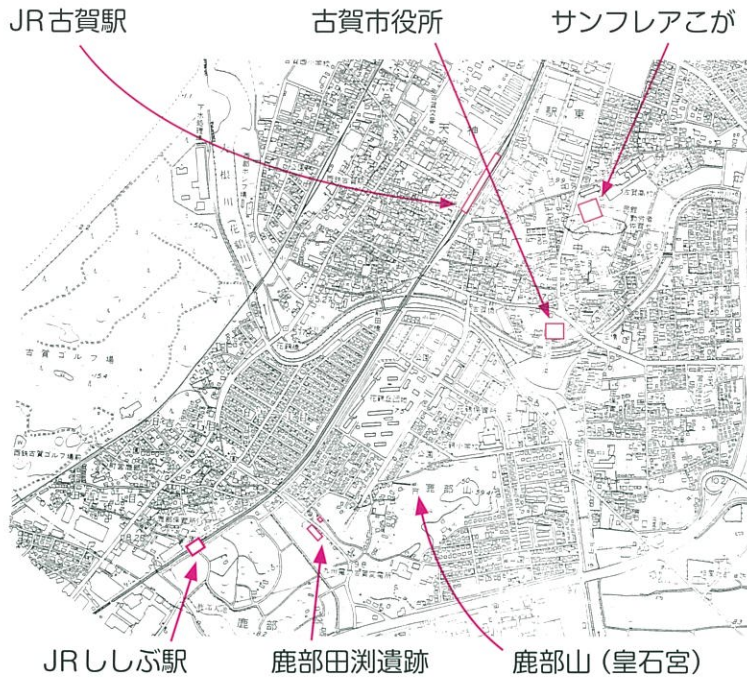


ししぶ駅界限 2 糟屋屯倉～古代史への道しるべ

稲穂：稲（イネ）が朝鮮半島から直接北部九州沿岸に伝わったのは紀元前4、5世紀ごろであろう。学者によって前後差があるが、朝鮮半島から渡来してきた人たちは沿岸の各所に住みついていった

と考えられる。福岡市板付遺跡や、新宮町夜臼遺跡、古賀市六ノ坪・百田遺跡等は初期農耕遺跡である。玄界に渡来してきた人たちは、沿岸部あたりに居を構えながら次第に内陸部へと移動していった。



稲穂



復元建物



復元：横田義章氏（古賀市文化財保護審議会委員）

ししぶ駅周辺は丘陵あり、水田ありと豊かな農耕地帯で、秋には稲穂が頭をたれていた。さて、駅名として、「ししぶ」の地名と鹿部の文字は残ったが、新団地をきっかけに、町名は美明みあけになった。屯倉を広辞苑で

調べると「ミは接頭語、ヤケはヤカ（宅・家）の転・屋舎・倉庫の意」とあり「大和朝廷の直轄領から収穫した稲米を蓄積する倉、転じて朝廷の直轄領、官家、屯家、屯宅、三宅などともかく」とある。鹿部田淵遺跡は古賀市鹿部土地区画整理事業に伴い発掘が行われ、大型建物の柱列群が発掘され、これが日本書紀に記載されている継体天皇22年（528）の磐井の乱に敗れた磐井の子、葛子が献上したミヤケではないかという説があり、新町名の美明は「屯倉」の響きをかけ、美しく明るい未来へのびる街をイメージした、歴史性と発展性をあわせもった名前である。遺跡は平成21年7月に県文化財の指定を受け、平成22年には建物跡は保存整備され歴史公園として残されることになった。

甲冑(よろいかぶと)：国道3号線の古賀市と新宮町の境にあった永浦古墳群四号墳の石棺から出土したものである。時代は5世紀中ごろ、甲は三角板鍔留短甲(鉄板を切り、

鍔でとめたもの)、冑はひさしがついた眉庇付冑という。さらに頸甲、肩甲がセットになっている。他に大量の剣・刀・鉄鏃などの武器類、鉋・鉄斧などの工具、1個の小さな壺、金製の耳環が副葬されていた。一括して県指定の文化財となっている。



甲冑



鮎



蜻蛉

蜻蛉(トンボ)：アカトンボ、オニヤンマ、シオカラトンボなど少年時代の懐かしい生きものだ。捕虫網で追い、棒や竹にとまっているのを手掴みしたり、糸にくくって遊んだりしたものである。

貝(カイ)：波間に漂う二枚貝と巻貝、古賀の浜は、新宮から福津市まで9kmの弓状の浜の、ほぼその中央にあり、春の大潮時には貝掘具を使って砂をかき、チョウセンハマグリやキヌガイ、コタマガイ、ツメタガイなどがとれる。夏にはナミノコガイ(波の子貝)が干満時にあらわれる。

鶯(ウグイス)：春鳥、春告鳥、歌詠鳥と呼ばれる。冬が終わるころ梅の花が咲くと、ウグイスの声で春が来たことを実感させてくれる。

ししぶ駅前の案内板を頼りに、鹿部山や歴史公園など、この地域一帯を散策すると歴史や人々の暮らしをより身近に感じることができよう。

足をのばして古賀市立歴史資料館を訪ね、さらに学びを深めるのもいい。

○参考文献

れきしのアルバム、No.5 鹿部山経筒、No.13 鹿部皇石宮出土銅戈、No.15 永浦古墳群、No.20 鹿部田淵遺跡



鹿部田淵遺跡 大型建物跡

鮎(フナ)：この地の一面に鹿部大池があったが埋め立てられてなくなった。江戸時代、朝鮮通信使が相島に寄った時のために、大池には鮎や鯉が飼われ、相島に通信使が到着すると烽火をあげて鮎・鯉を運んだという。この池の蓮花は小ぶりで茎が長く非常に美しかったと懐かしむ人たちも多い。



貝



鶯